

# “介護等体験”が大学生の障害児・者観におよぼす影響について 文教大学の事例から

八藤後 忠夫\* 霜田 浩信\*\* 星野 常夫\*\*\* 水谷 徹\*\*\*\*

## On the Effect of Experience at The Nursing and Care, etc. of the University Students concerning the Handicapped Person or Child Regard

Tadao YATOUGO, Hironobu SHIMODA, Tsuneo HOSHINO, Tohru MIZUTANI

This investigation was carried out for 137 students. The purpose of the research is for conforming the effect of the experience of actual condition and Nursing and Care, etc. of seeing "Handicapped child and person" of the student.

It became a result like the following. 1) "The Intelligibility Score" before the participation was shown approximately high, and especially, it was remarkable in the region of the idea goodwill. Then, this tendency be shown by the control population high. 2) Intelligibility Score of the participation group showed the tendency in the increase in the whole. 3) It was guessed that the tendency holding continuance had been done after 3 months. 4) From this investigation, as the background, the effect of prior guidance and experience is guessed, and it is not possible, and there will be that its assertion is done as a factor.

### 序 論

1998（平成10）年4月1日施行の「介護等体験特例法」（註1）に基づき文教大学においては1999（平成11）年度以降、年間500名を超える学生にこの「介護等体験」を実施し、5年を経過した。本学の「介護等体験」（以下「体験」）では2年次で特殊教育諸学校、3年次で福祉施設における体験（ともに2日間）を実施している。なお、体験参加学生に

対しては事前指導（註2）ならびに参考図書の配布がなされている。本稿は、今後の本学における体験のあり方を検討するための一作業として特に「特殊教育諸学校」における体験に焦点を絞り、体験学生の障害児・者観の実態とその変容等に関して分析・検討することをその目的とする。

### 対象と方法

当該となる本学2年生を中心に、計255人を調査票配票の対象とした。これは実施時期の本学越谷校舎全学部生数4,544人の5.6%にあたる。255人の内数は体験を介入要因としたその影響を確認する意図から、体験参加群

---

\* やとうご ただお 文教大学教育学部  
学校教育課程  
\*\* しもだ ひろのぶ 同上  
\*\*\* ほしの つねお 同上  
\*\*\*\* みずたに とおる 同上

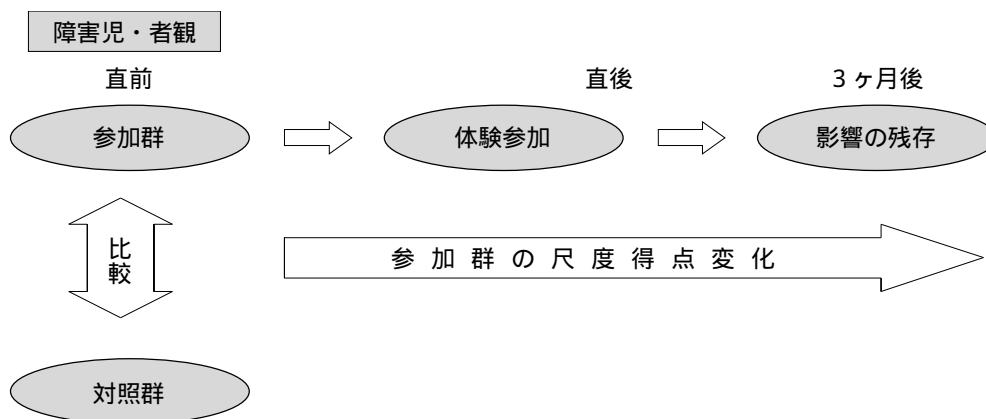


図1 調査と分析の枠組み

(以下「参加群」)154人(年間参加学生総数の30.7%),比較対照としての体験不参加群(以下「対照群」)101人を教育・人間科学部から有意抽出した(松井,1989)。各群とも同様の自記式調査票を用いその内容は,基本属性(性・学年・学部),「障害児・者」観に関する5領域に区分された28項目の質問文(文末資料・調査票)で構成されている。参加群に対しては体験参加「直前」「直後」「3ヶ月後」の3時点における回答を求め,さらに項目ごとに自由記述の欄を設けた。参加群の実習校は知的障害児対象の養護学校5校,ろう学校2校,計7校である。養護学校への参加群が125人,81.2%を占める。体験の時期は9月上旬に集中しているが,ろう学校と一部の養護学校は10月上旬に及んでいる。また,この参加群は2003年7月2日に教育学部特殊教育研究室の教員から同時・一斉に約1時間程度の講義を参考資料「フィリア」(全国特殊学校長会編,2003)を使用した事前指導を受けている。参加群への調査票の説明・依頼はこの事前指導の後に同研究室の他の教員が15分間行い,その後一斉に配票した。そして体験から約3ヶ月後にあたる翌2004年1月上旬に各自,指定の場所に提出するよう依頼した。対照群への調査票配布は参加群の「直前回答」に近い日程で,かつ配票可能な

時期に各学部の教員を通じてその教員の授業時間内に一斉集合的に行い回収した。調査の枠組みは図1のモデルに従った。データ解析においてはSPSS 11.0 J for Windowsソフトウェアを使用し,各群の比較に関しては分散分析,2群の母平均値の差の確認ではスチューデントのt検定,参加群の時系列データの解析は反復測定法を用いた。等分散の検定はLevene法,等分散でない場合はWelchの補正,多重比較にはScheffe法を使用した(土田,1995 中野,1989 室・石村a,2004 室・石村b,2002)。推計学的有意水準は危険率5%を基準とした。調査票の回収率は,参加群23.4%,対照群100.0%,全体で計137人,57.3%であった。参加群の回収率の低さが顕著である。このことに関しては,の結果と考察で総括する。

## 結果と考察

### 1 対象学生の基本属性

性別・学年別に表1-1,表1-2に示した。各群とも女子が圧倒的に多いがこれは大学全体的女子学生の占める割合の大きさを反映している。で既述したように,参加群の回収率がきわめて低かった。これは調査計画の設定と,参加群への配票・回収方法の「甘

表 1 - 1 対象の基本属性：性 (人)

	男子 (%)	女子 (%)	計 (%)
参加群 1 *	5 (45.5)	6 (54.5)	11 (100.0)
参加群 2 **	3 (12.0)	22 (88.0)	25 (100.0)
小 計	8 (22.2)	28 (77.8)	36 (100.0)
対照群 1 ***	12 (26.1)	34 (73.9)	46 (100.0)
対照群 2 ****	13 (23.6)	42 (76.4)	55 (100.0)
小 計	25 (24.8)	76 (75.2)	101 (100.0)
合 計	33 (24.1)	104 (75.9)	137 (100.0)

# ( ) は行に対する%

\* 特殊教育を除いた教育学部 2 年生      \*\* 文・人間科学部 2 年生の計

\*\*\* 人間科学部学生 2 年生      \*\*\*\* 教育学部特殊教育専修 1 - 3 年学生の計

表 1 - 2 対象の基本属性：学年 (人)

	1 学年 (%)	2 学年 (%)	3 学年 (%)	計 (%)
参加群 1	0	11 (100.0)	0	11 (100.0)
参加群 2	0	25 (100.0)	0	25 (100.0)
対照群 1	0	34 (73.9)	12 (26.1)	46 (100.0)
対照群 2	17 (30.9)	21 (38.2)	17 (30.9)	55 (100.0)
合 計	17 (12.4)	91 (66.4)	29 (21.2)	137 (100.0)

# ( ) は行に対する%

さ」と考えられる。直前・直後・3ヶ月後の当該時点ごとに回収すべきであった。また参加群と対照群の対応性（マッチング）も完全ではなかった。以下その点を十分配慮しながら分析・考察を進める。なお対照群 2 は特殊教育専修学生の 1 - 3 学年であり、この群は入学当初から「障害児・者の理解」等に関する専門的な学習を既に行っている。しかし介護等体験に相当する養護学校での実習は未体験であるため、あえてこの群に加え比較の対象とした。

## 2 従属変数の設定

生川（生川a, 1995）は、精神遅滞児（者）に対する健常者の態度を検討するために 5 領域、計 28 項目で構成された 5 次元（実践的好意・能力肯定・統合教育・地域交流・理念的

好意の 5 領域）尺度得点の有効性を報告している。この尺度得点は、先行研究文献のレビューの後、障害児心理学専攻の研究者 2 名・養護学校勤務の現職教員 2 名・精神薄弱関係の現職職員 2 名、計 6 名の意見を加味し、まず 40 項目の質問文を作成した。さらにこの 40 項目を主成分分析で 10 因子に絞り込み、バリマックス回転因子分析により最終的に 5 次元 28 項目を「精神遅滞児への態度尺度得点」として抽出している。なおこの 28 項目は、次元（領域）ごとにカテゴリー化された項目間の信頼性・内的整合性が Cronbach の係数（5 次元中の最小値 .663、最大値 .867）で保障されている。本稿ではこの尺度得点を、従属変数「障害児・者への大学生の理解度の尺度得点（以下「理解度得点」）」（註 3）として応用した。その根拠は、生川の「精神遅滞児（者）」

と本調査における「障害児・者」が近似していると判断したことによる。さらに本調査における参加学生の圧倒的多数が「知的障害の養護学校」で体験をしていることにもよる。従って生川（生川b, 1995）の質問文の形容のうち、「ちえ遅れ」を「障害をもつ人々（子ども）」に変換した。「ちえ遅れ＝精神遅滞児（者）」「障害児・者」という形容は「児」と「者」の2つの概念を内包するダブルパレルの過誤のリスクを負うが、調査対象以外の学生2名によるプリテストの結果、問題は無いと判断した。

### 3 質問項目の信頼性と得点分布

質問項目の信頼性は 係数、最小値 .682（理念的好意領域）最大値 .890（実践的好意領域）となった。これは生川（生川c, 1995）の結果と同様の結果を示した（表2 - 表6）。本調査票の信頼性・妥当性が確認されたと判断し、以下分析と考察を継続する。なお、の1「対象学生の基本属性」に示したように、女子が圧倒的多数を占めたため、性別ならびに学年別の比較は行わないこととした。理解度得点の分布と特徴について、まず参加直前の28項目の総得点の平均では一元配置分散分析の結果、df・自由度135（群間3，群内132），F値9.081，有意水準 $P = .000$ で主効果が確認された。対照群2 - 対照群1 - 参加群1 - 参加群2の順で高かった。各群の理解度得点比較は4で検討する。また領域において、最も平均得点の高かったのは、地域交流領域（4.46）で全てが4.2以上を示した。この領域での最高得点項目は「障害をもつ人々に働く職場を提供することは必要」で、4.64であった。続いて高かったのは理念的好意領域（4.41）で、「障害をもつ人々のために、地域環境をもっと住みやすいものにしてゆくべきだ」が4.69を示した。この2つの項目は領域こそ異なるが、職場も地域も近接した概念と考えられ、同様の高得点を示したものと

推察される。一方、この領域の「障害をもつ人々のことは、社会全体が責任を持つべきだ」が3.97の最低点を示した。このことは対象者の福祉の理念と実情における葛藤を窺わせる。3番目に高かったのは実践的領域（4.22）で、「障害をもつ人々が困っていたら助けてあげたい」が4.62の高値を示した。逆に「障害をもつ人々が地域社会で生活することで、地域社会によい影響がもたらされる」が3.89の低値を示した。これもまた、障害児・者への現実的眼差し、つまり理念と行為・行動の一致の困難性が推察されよう。以下、能力肯定領域・統合教育領域、と続いた。この2領域では「障害をもつ子どもも普通の社会生活を送ることが出来る」3.72、「障害をもつ子どもも、普通学級へ行ったほうがその子のためにもよい」3.04で低値を示し、さらに「普通学級でも、障害をもつ子どもを十分に教育することができる」が、2.72で28項目中、最低値であった。しかし、この項目を除いた他の27項目では3.00を超える得点を示した（表2 - 表6）。

### 4 参加群と対照群の理解度得点比較

領域ごとに等分散の検定の結果Welchの補正にしたがって主効果の確認された領域においてのみ、参加直前の各項目の理解度得点の平均値を群間比較した。5領域全てにおいて多くの主効果が示されたが、Levene統計量をもとに平均値同質性を検定した結果、最終的には4領域・4項目においてのみ群間の有意な平均値の差が確認された。これはサンプルサイズの小ささと不均等性に由来すると思われる。なお、ここでは有意確率 $P < .05$ を超えている項目も表記するが、 $P < .07$ を超えた項目は除外した。まず実践的好意領域の「障害をもつ人々のためのボランティア活動に参加したい」では、参加群2の得点平均が参加群1よりも有意に高く示された。しかしともに対照群よりも低値の傾向にあった。統

表2 実践的好意領域（6項目）の理解度得点 n = 137（内・参加群 36）

質問項目	平均値	標準偏差
・障害をもつ人々が地域社会で生活することで、地域社会により影響がもたらされる	3.89	.889
・障害を持つ人々のためのボランティア活動に参加したい	4.31	.881
・障害に関するテレビやラジオの放送を、見たり聞いたりしたい	4.11	.863
・障害をもつ人々と接したい	4.23	.860
・障害をもつ人々が困っていれば助けてあげたい	4.62	.571
・障害に関する新聞記事などを読みたい	4.13	.856
領域の平均	4.22	.243
# 各項目の最小値は1点 最大値は5点		
# 信頼性（項目の内的妥当性）Cronbach の 係数 = .890		

表3 能力肯定領域（7項目）の理解度得点 n = 135（内・参加群 34）

質問項目	平均値	標準偏差
・障害をもつ人々もまわりの人と仲良くする能力がある	4.45	.709
・障害を持つ子どもの教育効果はかなりある	4.02	.833
・障害をもつ子どもも普通の社会生活を送ることができる	3.72	.910
・障害をもつ人々も色々な作業をやっていける	4.10	.752
・一般の人の仕事の中には、障害をもつ人々が入ってできる仕事がたくさんある	3.87	.945
・障害をもつ子どもも、指導すれば効果が上がる	4.24	.758
・障害をもつ人々は、生活に必要な能力は身につけていく	4.02	.758
領域の平均	4.06	.238
# 各項目の最小値は1点 最大値は5点		# 欠損値 = 2
# 信頼性（項目の内的妥当性）Cronbach の 係数 = .810		

表4 統合教育領域（4項目）の理解度得点 n = 137（内・参加群 36）

質問項目	平均値	標準偏差
・普通学級でも、障害をもつ子どもを十分に教育することができる	2.72	.961
・障害をもつ子どもは他の子どもたちと一緒に普通学級で勉強することができる	3.11	.871
・障害をもつ子どもも、普通学級へ行ったほうがそのこのためにもよい	3.04	.775
・障害をもつ子どもが普通学級へ通うことは、周囲にもいい影響がある	3.96	.799
領域の平均	3.21	.530
# 各項目の最小値は1点 最大値は5点		
# 信頼性（項目の内的妥当性）Cronbach の 係数 = .768		

表5 地域交流領域（7項目）の理解度得点 n = 137（内・参加群 36）

質問項目	平均値	標準偏差
・障害をもつ子どもも他の子どもたちと一緒に生活することが必要だ	4.25	.812
・障害をもつ人々もどんどん社会参加をした方がよい	4.39	.667
・障害をもつ人々に働く職場を提供することは大切だ	4.64	.565
・障害をもつ人々にとって、同年代の人との交流は必要だ	4.44	.685
・他の人たちと障害をもつ人々がまじわることはたいせつなことだ	4.58	.639
・他の子どもたちと障害をもつ子どもと一緒に遊ぶことはよいことだ	4.48	.729
・一般の人は、障害をもつ人々ともっと接触することが必要だ	4.47	.642
領域の平均	4.46	.128

# 各項目の最小値は1点 最大値は5点

# 信頼性（項目の内的妥当性）Cronbach の 係数 = .857

表6 理念的好意領域（4項目）の理解度得点 n = 137（内・参加群 36）

質問項目	平均値	標準偏差
・障害をもつ人々のために、地域環境をもっと住みやすい環境にしてゆくべきだ	4.69	.627
・障害をもつ人々が仕事につけるように国のほうでもっと働きかけるべきだ	4.53	.654
・障害をもつ人々の面倒を見るのは、親だけでは限界がある	4.46	.777
・障害をもつ人々のことは、社会全体が責任を持つべきだ	3.97	.899
領域の平均	4.41	.308

# 各項目の最小値は1点 最大値は5点

# 信頼性（項目の内的妥当性）Cronbach の 係数 = .682

合教育領域の「障害をもつ子どもが普通学級に通うことの得点は、周囲にも良い影響がある」では、対照群1 - 対照群2 - 参加群1の順に有意に高く示された。

これは対照群1（人間科学部学生）と対照群2（教育学部・特殊教育専修学生）におけるノーマライゼーション等の学習や福祉等に関する理解度の高さがこの項目の得点に反映されたとも推察される。地域交流領域の「障害をもつ人々もどんどん社会参加をした方がよい」では、全体的に4.00以上の高値の傾向が見られ、対照群1が参加群1 - 2よりも有意に高く示された。理念的好意領域の「障害をもつ人々が仕事につけるように国の方でもっと働きかけるべきだ」でも、同様に全体的に

高値の傾向が示され、対照群2 - 対照群1 - 参加群1の順で有意に高く示された（表7 - 表10）。

#### 5 参加群の理解度得点の推移

5領域全体計28項目の単純加算得点に関して、参加の「直前」「直後」「3ヶ月後」を反復測定値、参加群1 - 2群をグループとする2要因の一元配置分散分析を行ったところ、3つの時点の得点に有意な差異が確認された。群間の有意な差は示されなかった。「実践的好意」「能力肯定」「統合教育」「地域交流」「理念的好意」の5領域各々においても同様な結果が示された。全体的に直後に有意な得点の増加が示され、特に「実践的好意」領域で

表7 実践的好意領域の多重比較



質問項目 ・ 障害を持つ人々のためのボランティア活動に参加したい				
	人 数	平 均 値	標準偏差	有意確率
参加群 1	11	3.18	1.041	* 
参加群 2	25	3.76	.831	
対照群 1	46	4.28	.720	* 
対照群 2	55	4.82	.434	
# Welch補正後のScheffe法による				* P = .063
# 主効果 df (群間自由度) 3				F 値 22.77 P < .001 有意

表8 統合教育領域の多重比較



質問項目 ・ 障害をもつ子どもが普通学級へ通うことは、周囲にもいい影響がある				
	人 数	平 均 値	標準偏差	有意確率
参加群 1	11	3.27	1.009	* 
参加群 2	25	3.56	.583	
対照群 1	46	4.15	.698	* 
対照群 2	55	4.13	.795	
# Welch補正後のScheffe法による				* P = .067
# 主効果 df (群間自由度) 3				F 値 7.05 P < .001 有意

表9 地域交流領域の多重比較

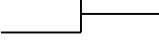

質問項目 ・ 障害をもつ人々もどんどん社会参加をした方がよい				
	人 数	平 均 値	標準偏差	有意確率
参加群 1	11	4.00	.894	* 
参加群 2	25	4.00	.645	
対照群 1	46	4.50	.506	* 
対照群 2	55	4.55	.662	
# Welch補正後のScheffe法による				* P = .067
# 主効果 df (群間自由度) 3				F 値 10.77 P < .001 有意

表10 理念的好意領域の多重比較

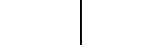

質問項目 ・ 障害を持つ人々が仕事につけるように国のほうでもっと働きかけるべきだ				
	人 数	平 均 値	標準偏差	有意確率
参加群 1	11	4.27	.786	* 
参加群 2	25	4.00	.707	
対照群 1	46	4.59	.580	* 
対照群 2	55	4.76	.508	
# Welch補正後のScheffe法による				* P = .052
# 主効果 df (群間自由度) 3				F 値 10.22 P < .001 有意

表11 参加群の理解度得点（合計）の推移

n = 34（欠損値2）

	直前（標準偏差）	直後（標準偏差）	3ヶ月後（標準偏差）	F値	有意確率
領域全体	92.71（12.75）	115.09（9.26）	114.59（10.16）	70.75	***
実践的好意	11.31（2.53）	25.67（3.01）	24.78（3.15）	427.06	***
能力肯定	25.74（4.08）	29.82（3.24）	29.76（2.91）	21.06	***
統合教育	11.31（2.53）	11.50（2.55）	12.36（2.51）	7.24	*
地域交流	28.33（4.04）	30.92（3.15）	30.28（3.06）	7.15	*
理念的好意	15.94（2.16）	17.47（1.61）	17.67（1.79）	18.91	***

# 対象者内対比の検定

# 線型2要因間自由度df（群×領域）= 1

# 得点満点は項目によって異なる

\* P &lt; .05 \*\*\* P &lt; .001

は顕著な増加傾向が確認された。「統合教育」と「理念的好意」領域では直後 - 3ヶ月後と顕著ではないものの徐々に得点の増加を繰り返すパターンが確認された。他の領域においては、直後に得点が増加し3ヶ月後にはやや低くなる傾向を示したが、この3ヶ月後の得点はいずれも直前の得点よりも高値を示した（表11）。28項目全ての反復測定については紙面の関係から割愛するが、表7、表8において対照群よりも有意に低値が確認された実践的好意領域の「障害をもつ人々のためのボランティア活動に参加したい」と統合教育領域の「障害をもつ子どもが普通学級に通うことは、周囲にもいい影響がある」の2項目に関してその得点推移を確認した。「障害をもつ人々のためのボランティア活動に参加したい」の項目では、直後に有意な増加を示し、3ヶ月後にやや低くなるものの直前の得点を上回っていた。「障害をもつ子どもが普通学級に通うことは、周囲にもいい影響がある」においては、直後 - 3ヶ月後と順に得点が僅かではあるが有意に増加していた（表12 - 表13）。

以上のように殆どの項目において参加直後の得点増加が確認され、特に、統合教育領域と理念的好意領域の2つにおいてはその後においても得点増加の傾向が確認された。

## 6 全体的総括と今後の課題

生川（生川d, 1995）は精神遅滞児（者）

に対する健常者の態度に関して、まず一般的特徴として地域交流領域と理念的好意領域の得点の高さと統合教育領域の得点の低さを報告している。本調査においても参加直前においては、地域交流領域 - 理念的好意領域の順で高値の傾向が示され、統合教育領域の得点低値傾向が確認された。生川は自己との関わりの薄い地域交流・理念的好意領域（「社会参加」や「地域環境の整備」）では態度得点が高く、自己との具体的な関わりの深い統合教育・実践的領域（「普通学級での精神遅滞児の教育」「精神遅滞児のためのボランティア活動」）では反対に低くなる傾向があると考えしている。

本調査の、実践的好意領域の「障害をもつ人々が地域社会で生活することで、地域社会により影響がもたらされる」の項目においてのみ低値の傾向が示された。本稿では、体験参加を介入媒介とした理解度得点の推移に焦点を絞ったため、得点推移の背景を具体的に推察することはできない。因みに生川は一般に精神遅滞児（者）との接触経験の頻度と実践的好意・地域交流領域との間に有意な関連があり、接触頻度の高い人ほどこの2領域の得点が高く、この傾向は女性に強く示されると報告している。また大谷（大谷a, 2001）は知的障害児に対する健常児の態度形成に関して、交流の事前指導の有効性、特に障害児に関する情報提供の重要性を指摘している。



表12 実践的好意領域：「ボランティア活動への参加意欲」得点の推移  $n = 36$

	直前 (標準偏差)	直後 (標準偏差)	3ヶ月後 (標準偏差)	F 値	有意確率
参加群 1-2	3.58 (1.05)	4.25 (.69)	4.11 (.79)	9.31	$P = .004$
# 対象者内対比の検定	# 線型 2 要因間自由度 $df$ (群 × 領域) = 1				
# 群間; n.s (有意差なし)					

表13 統合教育領域：「普通学級へ通うことのよい影響」得点の推移  $n = 36$

	直前 (標準偏差)	直後 (標準偏差)	3ヶ月後 (標準偏差)	F 値	有意確率
参加群 1-2	3.47 (.74)	3.67 (.77)	3.78 (.68)	4.16	$P = .049$
# 対象者内対比の検定	# 線型 2 要因間自由度 $df$ (群 × 領域) = 1				
# 群間; n.s (有意差なし)					

このことは、今回の調査で参加群の参加後の得点が増加したことのひとつの要因と考えられ、同時に本学における「事前指導の有効性」が示唆されよう。さらに大谷 (大谷b, 2002) は生川の5次元尺度得点による教育学部学生を対象とした調査から、生川の報告と同様な「接触経験」と態度得点の関連を認めながらも、この傾向が学生の「自発性」に影響を受ける側面を指摘し、将来福祉・保育・障害児 (者) の教育に関わる学生への指導カリキュラム検討の必要性を指摘している。本調査では参加群に対して質問項目の多くの部分に自由回答を求め、事前指導の評価に関しても具体的かつ詳細な学生からの指摘がある。今回は自由記述部分を分析・検討をしないが今後の研究課題のひとつとしたい。知的障害養護学校における介護等体験に関して若山ら (若山ら, 2000) は、体験参加学生の殆どが初めてのことであり概してこの体験を肯定的に受け止めていること、体験によって障害児・者への不安が解消されたことを報告している。しかし生川 (生川d, 1995) や大谷 (大谷b, 2002) の指摘を加味すれば、2日間の体験によって「意識 (理解)」や「態度」に変容をもたらしたと断言することは避けるべきであろう。その意味から本稿の参加群の得点推移の検討は影響の「残存」という視点から重要

である。そして本調査の結果から概して体験直後の得点増加、さらには3ヶ月後の得点の「持続性」の傾向が推察されたが、これらの背景の特定に関しては今後の調査を待たねばならない。つまり本調査の得点推移の背景には基本的に社会全体のノーマライゼーション理念の浸透が大きく影響している (河合, 2004) と思われるからである。また特に統合教育に関しては、単に普通学級に「障害児」が在籍していることではなく通常学級で障害に起因するニーズに対応した特別的教育とケアと発達が保障されている状態であるという指摘は重要であろう (高橋, 2002)。その意味で今回の質問項目はその尺度の信頼性が保障されたものの、「得点の高さ」を即ち「理解度の高さ」に直截に結びつけることは困難であると思われる。特に統合教育領域において4項目全てが低値を示したが、この得点を根拠に「理解度が低い」と断言することはできないであろう。今後の調査においては、障害概念やその障害の程度、「児」と「者」を分けるなどきわめて具体的な設定のもとに行われる必要があると考えられそのことを今後の課題としたい。

【謝辞】

最初に本調査票の回答に協力してくださった対象学生の皆さんに感謝する。また調査票の回収作業にご協力下さった本学教務二課のスタッフの方々ならびに特殊教育研究室の2名の助手に深謝する。なお本研究は2003年度文教大学教育学部共同研究費の助成を受けて行った。

【註1】「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」(平成9年法律第90号)により、これから小・中学校教諭の免許状取得しようとする人は盲・聾・養護学校ならびに社会福祉施設等の施設で「介護等の体験」をすることが必要となっている。この法律の是非に関して今回は考察の対象としない。

【註2】事前指導の内容は、主に1)日本における特殊教育諸学校の歴史と現状、2)障害に関する基本的な考え方、3)障害の種別、4)介護等体験の意義、5)体験にあたっての諸注意の5点であった。

【註3】生川の研究においては健常者の「態度」に焦点が置かれている。しかし質問項目には「意見」や「意識」を問う項目が多く含まれている。生川はそこから「態度」を推察している。本稿では「意識」に焦点を当て、「障害児・者」観を「理解」概念として捉え「理解度得点」とした。

- ・室淳子・石村貞夫b:SPSSでやさしく学ぶ統計解析,PP.146-150,東京書籍,2004
- ・生川善雄a:精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究,特殊教育学研究32(4),PP.12-13,1995
- ・生川善雄b:精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究,特殊教育学研究32(4),P.14,1995
- ・生川善雄c:精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究,特殊教育学研究32(4),P.13,1995
- ・生川善雄d:精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究,特殊教育学研究32(4),P.16-17,1995
- ・大谷博俊a:交流教育における知的障害児に対する健常児の態度形成,特殊教育学研究39(1),PP.21-22,2001
- ・大谷b:知的障害児(者)に対する健常者の態度に関する研究,特殊教育学研究40(2),PP.215-221,2002
- ・若山美津彦ら:知的障害養護学校における介護等体験に対する学生の意識調査,富山大学教育実践総合センター紀要NO.1:PP.45-50,2000
- ・河合康:教員免許状取得希望大学生に対して障害児教育に関する知識,技能をいかにして身につけさせるか,東京財団研究報告書(1),PP.86-87,東京財団,東京,2004
- ・高橋智:統合教育と特別ニーズ教育,鮫島宗弘(監修)障害理解への招待(第2章),PP.15-19,日本文化科学社,東京,2002

【文献】引用順に記す

- ・松井敬:標本調査論,PP.7-9,内田老鶴圃,1989
- ・全国特殊学校長会(編・著):介護等体験ガイドブック・フィリア,ジアース教育新社,2004
- ・土田昭司:社会調査のためのデータ解析入門,PP.107-120,有斐閣,1995
- ・中野正孝:看護系の統計調査入門,PP.205-210,真興交易医書出版部,1989
- ・室淳子・石村貞夫a:SPSSでやさしく学ぶ統計解析,PP.174-178,東京書籍,2004

障害児・者 観 に関する アンケートのお願い

2003(平成15)年 7月上旬  
教育学部 特殊教育研究室

特殊教育研究室では、様々な視点から「障害児・者」の「問題」に関して、検討をしています。  
その一環として、以下のアンケートに是非お答え願いたいのです。

無記名で、みなさんの実名が公になることはありません。安心して回答下さい！

是非ご協力のほど、重ねてお願いいたします。

\* 講義担当の先生を通じて配表します。1週間後、担当授業の先生にご返信下さい。

宜しくお願いいたします。

Q1 「障害をもつ子どもや人々」に関して、現在、あなたが感じていることについてお聞きします。

以下の28個の考えに対して、当てはまる番号をそれぞれ1つ選び、○で囲んで下さい。

〈回答例〉	全く そう思わない	どちらかといえば そう思わない	どちらとも 言えない	どちらかといえば そう思う	全く そう思う
	( 1	2	3	4	5 )

- 1 障害をもつ人々が地域社会で生活することで、地域社会により影響がもたらされる ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 2 障害をもつ人々もまわりの人と仲良くする能力がある ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 3 普通学級でも、障害をもつ子どもを十分に教育することができる ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 4 障害をもつ子どもも他の子どもたちと一緒に生活することが必要だ ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 5 障害をもつ人々のために、地域環境をもっと住みやすいものにしてゆくべきだ ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 6 障害をもつ人々のためのボランティア活動に参加したい ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 7 障害をもつ子どもへの教育効果は、かなりある ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 8 障害をもつ子どもは他の子どもたちと一緒に普通学級で勉強することができる ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 9 障害をもつ人々も、どんどん社会参加した方がよい ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 10 障害をもつ人々が仕事につけるように国の方でもっと働きかけるべきだ ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 11 障害に関するテレビやラジオの放送を、見たり聞いたりしたい ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 12 障害をもつ子どもも普通の社会生活を送ることができる ----- ( 1 2 3 4 5 )
- 13 障害をもつ子どもも、普通学級へ行ったほうがその子のためにもよい ----- ( 1 2 3 4 5 )

【 裏面へ続きます 】

- |  |                     |
|--|---------------------|
| 14 障害をもつ人々に働く場を提供することは大切だ              | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 15 障害をもつ人々の面倒を見るのは、親だけでは限界がある          | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 16 障害をもつ人々と接したい                        | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 17 障害をもつ人々も色々な作業をやっている                 | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 18 障害をもつ子どもが普通学級へ通うことは、周囲にもいい影響がある     | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 19 障害をもつ人々にとって、同年代の人との交流は必要だ           | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 20 障害をもつ人々のことは、社会全体が責任を持つべきだ           | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 21 障害をもつ人々が困っていれば助けてあげたい               | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 22 一般の人の仕事の中には、障害をもつ人々が入ってできる仕事がたくさんある | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 23 他の人たちと障害をもつ人々とがまじわることは大切なことだ        | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 24 障害に関する新聞記事などを読みたい                   | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 25 障害をもつ子どもも、指導すれば効果が上がる               | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 26 他の子どもたちと障害をもつ子どもと一緒に遊ぶことはよいことだ      | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 27 障害をもつ人々は、生活に必要な能力は身につけていく           | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |
| 28 一般の人は、障害をもつ人々ともっと接触することが必要だ         | ----- ( 1 2 3 4 5 ) |

**Q2** 次に、あなた自身についてお聞きます。

- 1) あなたの所属する学部は? ---- ( ) 学部
- 2) あなたの性は? ----- ( 1. 男 2. 女 ) \*番号に○を!
- 3) 学年は? ----- ( ) 年

\* このアンケートは以上で終わりです。

\* ご協力有り難うございました!.

# なお、このアンケートに関しての、問い合わせは以下にお願いいたします。

4号館 1F 特殊教育研究準備室